



**KEIO-GSEC Project on Frontier CRONOS**

**: Research on Risk Communication and Management**

**based on CRONOS Authoring Tool**

(文部科学省学術創成研究：暦象オーサリング・ツールによる  
危機管理研究,2002 年度 - 2006 年度)

日本におけるオーラルヒストリー  
- その現状と課題、方法論をめぐって -

**Working Paper**

**Series**

**No.03-004**

清水 唯一朗 ( 東京大学特任助手 )  
mail to : [yuichiro@mk.rcast.u-tokyo.ac.jp](mailto:yuichiro@mk.rcast.u-tokyo.ac.jp)

---

August 12, 2003 / 引用される場合には著者の許可を得てください。

NOTE: Please not for citation or quotation without the permission from the author.



Global Security Research Center, KEIO University  
2-15-45 Mita, Minato-ku, Tokyo, 108-8345 Japan  
(tel) 81-3-3453-4511

## はじめに>

本稿は近年脚光を浴びるようになってきた研究手法であるオーラルヒストリーについて、その意義・手法を紹介し、歴史研究におけるオーラルヒストリーの活用を提案するものである<sup>1</sup>。

近年、とりわけ政治史、政策研究におけるオーラルヒストリーの隆盛は目を瞠るものがある。本稿では政策研究大学院大学オーラル・政策情報プロジェクト、東京大学先端研オーラルヒストリープロジェクトに携わってきた経験から、より具体的にオーラルヒストリーの現状、課題、方法論の展望を述べていきたい。

### 1、オーラルヒストリーとは何か。

#### (1) オーラルヒストリーの定義

そもそも「オーラルヒストリー (oral history)」とは何か。この点から論を起こしていくとする。この分野における第一人者として知られるエセックス大学のポール・トンプソンはこれを「記憶を歴史にする」ことであると定義している<sup>2</sup>。また、中国・台湾においては一般にこれを「口述歴史」と表現している。すなわち、「オーラルヒストリー」とはある個人にその体験を口述してもらい、これを記録、分析する一連の作業を総称することである。

#### (2) エリート・オーラルとライフストーリー

オーラルヒストリーは、それ自体の歴史的経緯から鑑みて、目的、研究対象によって二系統に大別することができよう。

第一は、政治家、官僚など公的な地位にあったものの記憶を国家の財産として残す作業である。学問の世界において「オーラルヒストリー」という用語が意識的に使われるようになったのは、後にピューリッツァー賞を受賞する歴史家アラン・ネヴィンズ (Allan Nevins) が 1948 年にコロンビア大オーラルヒストリーリサーチオフィス<sup>3</sup>を創設した時であるといわれている<sup>4</sup>。同オフィスは大統領をはじめとする為政者層を中心に精力的にインタビューを重ね、今日でもオーラルヒストリーの一大拠点となっている。このオフィスの設立経緯が第二次世界大戦の記憶を歴史に残すことにあったことはいうまでもない。アメリカにおけるこうした動きを受けて、イギリスでもロンドン大学現代英国政治研究所 (ICBH)<sup>5</sup>を中心に政治家へのオーラルヒストリ

---

<sup>1</sup> 本稿は FCRONOS2002 年度第 9 回研究会における報告 (2003 年 3 月 1 日、於、慶應 G-SEC) を要約し、最新の動向などを加えたものである。報告の機会を与えてくださった FCRONOS 各位、研究代表者の友部謙一先生に御礼申し上げる。

<sup>2</sup> ポール・トンプソン (酒井順子訳) 『記憶から歴史へ オーラルヒストリーの世界』 (青木書店、2002 年)。

<sup>3</sup> <http://www.columbia.edu/cu/lweb/indiv/oral/index.html>

<sup>4</sup> 御厨貴 『オーラル・ヒストリー 現代史のための口述記録』 (中央公論新社、2002 年) 179 p。

以下、政策研究とオーラルヒストリーの関係については本書に多くを依っている。

<sup>5</sup> <http://www.icbh.ac.uk/icbh/welcome.html>。とりわけ Witness Seminar のペーパー集が充実している。

ーが展開されている。こうしたオーラルヒストリーは「エリート・オーラル」とも呼ばれる。

これに対して、そもそも歴史として残りにくいマイノリティ、技術者、女性などを対象としたオーラルヒストリーがある。こうした作業は歴史学がジェンダー、ポスト・コロニアル・スタディーといった分野に関心を示したのに応じて普及し、マイノリティ研究の分野ではかなりの広がりを見せている。その中心的な機関は、イギリスのナショナル・ライフ・ストーリー・コレクション（NLSC）やエセックス大学であろう。

およそこの二つの流れがあるわけだが、現在我々が用いている「オーラルヒストリー」という枠はあくまで学問的な規定に過ぎない。実際にはほぼ同様のことがはるか昔より行われてきている。例えば口伝、物語り、聞き書き、口述筆記といった「語り」「聞き取り」によって歴史や事象を後世に伝える作業は極めてこれと近いものである。では、次にこの「聞き取り」の歴史を回顧してみたい。

### （3）日本における「聞き取り」の歴史

わが国においては、極めて古くから記録を残す為の聞き取りが意識的に行われてきた。エリート・オーラルに近い文脈でいえば行政のノウハウを伝える重要性は早くから認識されていたようで、すでに明治初期から、江戸幕府の役人が持つ行政情報を集積した『旧事諮問録』などの試みを確認することができる。これが明治中期以降になると出版文化の普及とあいまって「語り」の文字化のムーブメントとなっていく<sup>6</sup>。雑誌『太陽』などの大衆メディアで聞き書きの連載が好評であったことはよく知られている。また、やや形式は異なるが、座談会もこの中に位置づけることが出来よう。すなわち、わが国には少なくともすでに明治期に「聞く」ことで歴史を知る手法が根付いていたといえる。

他方、学術研究の分野ではより学問的な「聞き取り」調査が進められた。筆者の専門である政治史においても、戦前戦後を通じて実に多くの聞き取りが行われている。戦前においては吉野作造を中心とする明治文化研究会による聞き取りや、明治憲法制定 50 周年を記念した『憲政史編纂会談話筆記』（尾佐竹猛らによる）がある<sup>7</sup>。さらに戦後になると、敗戦によって資料が多く失われたことも影響してさかんに聞き取りが行われるようになった。『木戸日記研究会』や、辻清明らを中心とした『内政史研究会談話速記録』、マスコミ主体のものでは読売新聞の『昭和史の天皇』などがそれである。また、官庁の内部でも非公開を前提としてではあるものの、聞き取りによる行政情報の蓄積が行われていたことが知られている<sup>8</sup>。

また、経済においては中村隆英氏や尾高煌之助氏などによるヒヤリング、JILの高梨昌氏による労働関係の証言研究、社史作成時のインタビューなどが行われてきたことは周知の通りである。社会学の分野においては宮本常一が全国での聞き書きの成果から『忘れられた日本人』

<sup>6</sup> 例えば、『海舟夜話』、『福翁自伝』などが挙げられよう。

<sup>7</sup> 前掲、御厨、52p。

<sup>8</sup> 例えば大蔵省による「戦後財政史口述資料」など。

を著し、その後も生活史研究会などを中心としたグループが「聞き書き」や「ライフストーリー」についての研究を重ね、いまや研究手法として確立するに至っている。

しかし、こうした伝統的な「語り」や「聞き取り調査」は、つねに史料学からの批判を受けてきた。このためか、聞き取りの作業は一時退潮傾向を見せていた。

## 2、何故、今、オーラルヒストリーか。

### (1) 現代政治分析の現状

それが、近年、こうした聞き取りが復権の兆しにある。それにはいくつかの要因が考えられるが、主たる理由としては、歴史学においては史料発掘・公開が進み、戦後が研究対象とされるようになってきたこと、反面、その時代の史料的蓄積が未だ不十分であることが挙げられよう<sup>9</sup>。政治学においては自民党体制の崩壊によりその総括が必要となったこと、政治学の中で意思決定、政策決定を重視する志向が強まったことなどが挙げられよう。

こうした状況を打開するのはたゆまない史料発掘、統計的なアプローチのほかには聞き取りによる他はなかった。このため、史料学からの批判に耐えうる「聞き取り」が必要となったのである。こうして日本におけるオーラルヒストリーの萌芽、「聞き取り」の再生がおこったのである。これを踏まえて冒頭で提示したトンプソンの定義に筆者の私見を加えるなら、「伝統的な『語り』を史料学、歴史学の見地から吟味し歴史にする」とすることができよう。

### (2) オーラルヒストリーの長所

オーラルヒストリーを研究に用いる利点は大きく4つ挙げられる。第一に文字資料が存在しない、歴史にとって全く「未知」のを知りうることである。例えばライフストーリーがその対象とする一般個人の経験や家の文化、集落の歴史などは殆どの場合、文字化されておらず、聞き取りによって初めて知ることができるものである。これは政府や組織においても同様である。とりわけ、組織文化の場合はこれが如実である。その組織、時代において通年、常識となっていることは文字記録には極めて残りにくく、当事者が物故すれば消えてしまい二度と復元することはできない。

第二に、文字資料のみでは知りえない情報を得ることができる点である。例えば、閣議後の閣僚インタビューを例に考えてみよう。通常、我々が目にしうる閣議に関する文字資料は議事一覧くらいのものである。勿論、閣議を経た結論は公表されるが、議題と結論を結ぶ過程は全くのブラックボックスである。これを埋めるために閣議後の閣僚インタビューはあると考えてよいだろう。すなわち、クリアされた問題点、検討された部分という社会科学における重要な要素を得ることに聞き取りは絶大な力を発揮する。こうした状況は審議会や社内会議を取っても同様であろう。

---

<sup>9</sup> また、市町村制施行百年を期に各地方自治体が自治体史の編纂に取り組み、文字の残らない伝承、風俗、政治情報を集めるため盛んに聞き取りを行ったことも活性化の一因であろう。

とりわけ、我が国の官僚機構において意思決定の過程は文字資料としては残されにくいという<sup>10</sup>。このため、エリート・オーラルの中では意思決定過程を紐解くことがその大きな意義と考えられる<sup>11</sup>。加えて、聞き取りによって政策決定の中で消えていった選択肢、消えていった「可能性」をも知ることができる<sup>12</sup>。また、政策資料には特有の文法が存在し、これはその担当者自身でなければ解説が困難であるといわれる。加えて、法律ひとつを取ってみても、その立法意図、立法の中心概念が資料として残されることは極めてまれであるという。50年前の法律は50年前の時代観で見なければ理解しえるものではない。さらに今後、情報公開法によって文書の公開にある種の事前調整が行われることにより、文書による政策決定過程、意思決定過程の分析は困難さを増すと考えられる。加えて組織や時代の雰囲気、因果関係、印象風景を知るにはオーラルヒストリーは大変適している。組織の中で「常識」とされてしまっていることは記録には残されないものであり、こうした情報は、部外者である聞き手がいて初めて引き出しうるものである<sup>13</sup>。

第三に、聞き手が存在する点である<sup>14</sup>。自伝、回想録に執筆者自身の編集意図が強く反映されることはいうまでもない。勿論、オーラルヒストリーに於いてもこうした問題は存在するが、研究者、もしくは第三者である聞き手の存在はそれをある程度抑えることが可能である。さらに、自伝、回想録がある人物の場合、オーラルヒストリーによる確認、再話、想定外の質問や、それらに書かれていないが研究上重要である事項についての質問などが可能である。特に語り手が重要と考えることと、聞き手が重要と考えることには大きな開きがある。これは聞き手が認識しておくべき点であろう。

第四に、話し手の人生、価値観などを体系的に把握することが可能となる。ライフヒストリーを聞くことで、聞き手は次第に話し手の思考形態や行動様式を認識していくことができる。それにより、従前の一方的な語りや、単独事象についてのインタビューでは見えてこなかった部分が見えてくるのがままたる。

こうした利点を通して、仮設の構築、検証、その積み重ねによる事実の確定を、文字資料では不可能であった範囲まで広げていくことができるのがオーラルヒストリー総体としての利点として挙げられる点であろう。

### (3) 日本政治研究におけるオーラルヒストリーの取り組みとその成果

こうした利点から、近年、わが国政治学の分野でもオーラルヒストリーの成果を蓄積し、これを政策研究に用いようとする動きが根付いてきた。組織的な端緒となったのは1995年に東京都立大学法学部において発足した「戦後政策回顧研究会」である。1997年には同会を母体とし

---

<sup>10</sup> 例えば機械工業振興臨時措置法（機振法、1956年）を扱ったオーラルヒストリーの例が挙げられよう。

<sup>11</sup> 政策研究院創設記念国際シンポジウム（1997年11月）における下河辺淳氏の発言（政策研究院政策情報プロジェクト編『政策とオーラルヒストリー』中央公論社、1998年、67p）。

<sup>12</sup> 同シンポジウムにおける升味準之輔東京都立大学名誉教授の発言（同、76p）。

<sup>13</sup> 前掲、御厨、97p。

<sup>14</sup> 拙稿「オーラルヒストリーのススメ」（『世界と議会』471号、2003年7月）。



## (2) 対象へのアプローチ

分析事項が決まれば、次は聞き取り対象者の選定、アプローチを行うこととなる。テーマオーラルのように 이슈が先にある場合にはとりわけ聞き取り対象者の選定が重要となる。単一の政策について歴史的に見る場合には担当部局の局長、課長、課長補佐などが対象となるであろうし、単独の事項事件について検討する場合には担当者を出来る限り網羅的に選定することでクロスチェックの精度を高める必要が生じるであろう。

対象へのアプローチは紹介による場合と直接に依頼する場合がある。紹介による場合は、事前にある程度の信頼関係を得られる一方で、テーマオーラル、組織オーラルの場合は情報の偏りが生じる可能性があり注意を要する。

対象者との連絡が取れた場合には、一度、事前に顔合わせを行っておくとよい。これは、先方からある程度の事前情報（履歴など）を得ておくこと、先方の様子を把握して聞き方を考えることなど、聞き取りを充実したものとするための準備の意味合いがある。

## (3) 資料、質問表の作成

次に、聞き取り実施に用いる資料と質問表の作成が課題となる。聞き手が事前に研究するための資料と、当日、聞き取りの際に用いるリファレンス資料の二種類があると便利である<sup>19</sup>。事前研究資料は話し手自身の著作、話し手周辺の著作、関連する基礎文献などを網羅的に集めて作成する。当日の資料としては履歴、年表、関係人事一覧などを作成する。いずれも記憶の引き出しとして、話の流れを構成する軸となるものである。

質問表は時に話し手と共有される。ライフヒストリーの場合は時系列的に作成されるのが一般的であろう。質問表は進行の目安となるだけでなく、話が前後することの多い話し手や、多くの仕事を手がけてきた話し手の場合、記憶が錯綜による混乱を回避する羅針盤、もしくはこちらが話を戻すきっかけとしても有用となる。

他方、事前研究資料をどこまで相手と共有するかは、ひとつの問題となろう。資料を共有することにより話し手が記憶を喚起する利点がある一方、それに引っ張られてしまう、もしくは書かれていることを全く覚えておらず、聞き取りへの不安が増幅してしまう場合が考えられる。このため、通常は当日用いるリファレンス資料のみを共有するに留めている。

## (4) オーラルヒストリーの実施

いよいよ実施の段階になると、聞き手をどうするかが問題となる。聞き手の人数は、通常、三人で行うのがよいと考える。これは、質問、視点に多様性を持たせることと同時に、聞き手の集中力の問題がある。一対一の聞き取りの場合、聞き手はどうしても次の話題、話の振りかたに意識が向き、通常のように相手の話を深く理解するほどの余裕を持ち得ない。このため、三人がかわるがわる質問することで、より充実した質問を行える体制が整えられる。

---

<sup>19</sup> この点については拙稿「『工房』覚えがき」(「オーラルヒストリー」第8号(C.O.E オーラル政策研究プロジェクト刊、2003年1月)を参照のこと。

では、この三人はどのように構成するのがよいのであろうか。筆者は経験上、老壮青の構成が最も有効に機能するのではないかと考えている。相手に信頼感を与えるためにも、年齢と身分のある研究者が中心に座ることには大きな意義があろう。とりわけ、相手が官僚、政治家の場合はこの点が重要である。ついで、専門的分野に深い知識を持った壮年の研究者が内容の充実からして必要である。加えて、事前の資料を作成した若手がいればより質問は充実する。実際には対象者自身のことを最も熟知しているのは資料作成者であるからである。また、若手には若手なりの利点がある。オーラルヒストリーではしばしば、話し手が常識として話しながら、こちらには全く分からない事項がある。組織文化に関するものはその好例である。こうしたものはなかなか聞きにくいものであるが、若手はこれを躊躇無く聞くことができる。加えてややセンシティブな、触れにくい点について比較的安易に質問することが出来る。

政治家、官僚に対するライフストーリー形式のオーラルヒストリーの場合、個人差はあるが1回2時間で10回程度の聞き取りを行うことになる。この20時間というスパンの中で、同じことを手を変え品を変え、場合によっては次回再質問という形でゆっくりゆっくりと聞いていくこととなる。相手が往々にして高齢であることもあり、思い出させようとして過度にプレッシャーをかけることは、概して良い結果を生まない。こちらの聞きたいことだけでなく、相手の話したいことを聞くことが記憶の覚醒には重要となってくる。そして、聞き手が質問表に書かなかった、予想だにできなかった事例にこそ、大きな発見が存在していることも多い。

全10回のインタビューの中で最も重要となるのは第1回です。聞く側の数倍、聞かれる側は緊張していると考えてよい。このため、可能であれば第1回は生まれてから社会に出るまでの話に充てたい。これにはライフヒストリーを行うという意味もあるが、同時に、誰しもが持っている、決して特別ではない経験を語ることにより、話し手に聞き取りに対する安心感をもってもらおう効果があると考えている。

最後にわれわれが質問の中で注意している点を挙げておきたい。それは話し手に対して反論（議論）をしない、まとめをしないということである。相手の経験を相手が話すままに語ってもらうのがオーラルヒストリーの意義であり、それによってこそ認識の構図が見えてくるのである。オーラルヒストリーの場合は分析の場ではない。聞き手が纏めてしまうことは、そもそも誘導質問の恐れがあるし、後に引用する際のことを考えても禁忌である。

#### **(5) 書き起こし、修正、追加から公開まで**

インタビューが終了すると毎回、録音の書き起こし作業が出てくる。従来、大学のプロジェクトではこうした作業は大学院生、学部生が行うことが多かったが、出来れば専門業者に委託するのがよいと考えられる。それは第一に書き起こしの質の問題、第二に機密保護の問題によるものである。実際のインタビューはそのまま文章化することはほぼ不可能なものであり、これを意味合いを変えず、雰囲気壊さず再構築するにはかなりの経験を要する。さらに政治家、官僚の場合はとりわけ専門用語やジャーゴンを多用する話し手が多く、これを起こすには

相当の知識が必要となる。このため、その専門に通じた専門業者が最適と考える<sup>20</sup>。

そうして完成した第一次速記録は、聞き手話し手双方に送られ、文章チェック、訂正、修正、加筆、場合によっては削除が入ることとなる。これを受けて第二次速記録が作られることとなる。

いよいよオーラルヒストリーが終わると、刊行、公開の段階へ入ることとなる。その形態には商業出版、私家版、研究報告書としての刊行、速記録閲覧による公開が考えられるが、その場合には内容の問題から、必然的に第二次速記録が公開の対象となるであろう。公開に当たっては、いずれの形式の場合も契約、覚書が取り交わされることとなるが、これについては目下検討中の事項である<sup>21</sup>。

#### 4、今後の課題、FCRONOSにおけるオーラルヒストリーの可能性

##### (1) 今後の課題

今後の課題として指摘されるのは三点ある。第一にオーラルヒストリーの核となる機関の設置である。政策研究大学院大学のプロジェクトはすでに時限が近づいてきている。このため、現在、東京大学先端科学技術研究センターを中心に「オーラルヒストリー協会」の設置に向けて準備を行っている<sup>22</sup>。同協会では方法論の検討を中心に、オーラルヒストリーの普及を進めべく準備を進めている。

普及を進めるためには、実際にオーラルヒストリーを行いたいと思う研究者にノウハウを提供していくことや、ネットワークを構築していく必要がある。これが課題の第二である。オーラルヒストリーを採取する人材、オーラルヒストリアンの育成とネットワーク形成については上記の協会でスクールを展開していく予定である。各所で行われているオーラルヒストリーの状況が把握されることで、より機能的にオーラルヒストリーの進展、蓄積が可能となるであろう。この際に生じるであろう保存と公開の問題が課題の第三である。これは前述した権利関係とも相まって目下克服されるべき重要な課題である。反証可能性保持の観点からしても、オーラルヒストリーを用いた研究の発展に公開は欠かせないものである。

---

<sup>20</sup> テープスクライピングについては丹羽清隆『オーラルヒストリーとテープ起こし』（オーラルヒストリー方法論研究会シリーズ Vol2、C.O.E.オーラル政策研究プロジェクト、2002年）を参照のこと。

<sup>21</sup> 2003年9月に行われた国際シンポジウム「アジア太平洋・オーラルヒストリーワークショップ」では、この点について凝議がなされた。この問題には所蔵機関、保管の問題も付随する。なお、音声資料の保管については学習院大学東洋文化研究所がデジタル化を随時進めており、参考となる。同研究所の取り組みについては、<http://www.gakushuin.ac.jp/univ/rioc/archivist.html> を参照されたい。

<sup>22</sup> なお、社会学の分野では2003年9月に日本オーラルヒストリー学会が発足している。また、東京外国語大学21世紀C.O.E.プログラム「史資料ハブ地域文化研究拠点」のオーラル・アーカイヴ班が、アジア地域（日本を除く）限定ではあるものの、アーカイブ構築に向けた取り組みを進めている（URL [http://www.tufs.ac.jp/21coe/area/oral/han\\_03\\_oral.html](http://www.tufs.ac.jp/21coe/area/oral/han_03_oral.html)）。

## (2) FCRONOS におけるオーラルヒストリーの可能性

最後に、FCRONOS プロジェクトにおけるオーラルヒストリーの可能性について述べておきたい。本プロジェクトは暦象オーサリングにその重点が置かれている。その中のコンテンツとしてオーラルヒストリーはどのように位置づけられるのであろうか。

筆者はそもそもオーラルヒストリーとは文字資料と同様の情報を提供しつつ、文字資料では伝わらない、いわば隙間を埋めうるものであると考えている。とすれば、FCRONOS のブラウザ画面に表示される個々の事象の連関を生む形でオーラルヒストリーが生かされるのが好ましい状況であろう。

漫然とインタビューを行うだけではかかる成果は得られないであろう。この場合、テーマオーラル、組織オーラルの形態をとって、事象の連関を意識して質問表を作成し、それに沿って聞き取りを進めることが望ましいと考える。同様の質問を複数名に行うことで、より充実したオーラル・エビデンスが得られるであろう。

また、教育の観点から見たときには、オーラルヒストリーを取ることで自身が、事象に対する興味を抱かせ、具体的なイメージを持つ好機になるであろう。すでに小学生～大学生による一般人への聞き取りを進めている団体もあり<sup>23</sup>、また、大学の授業の中でもオーラルヒストリーを取り入れているものが見られるようになってきた<sup>24</sup>。FCRONOS が教育的側面を持つことを考えれば、仮説構築、仮説実証いずれの面においても、オーラルヒストリー実施の教育上の意義も大きいと考えられる。

### 主要参考文献>

- 御厨貴 『オーラルヒストリー 現代史のための口述記録』(中央公論新社、2002年)  
ポール・トンプソン 『記憶から歴史へ オーラスヒストリーの世界』(青木書店、2002年)  
原題: Voice of the Past  
香月洋一郎 『記憶すること・記録すること 聞き書き論ノート』(吉川弘文館、2002年)  
桜井厚 『インタビューの社会学 ライフストーリーの聞き方』(せりか書房、2002年)  
中野卓, 桜井厚編 『ライフストーリーの社会学』(弘文堂、1995年)  
佐藤郁哉 『フィールドワークの技法』(新曜社、2002年)  
政策研究院政策情報プロジェクト編 『政策とオーラルヒストリー』(中央公論社、1998年)  
清水唯一朗 「オーラルヒストリーのススメ」(『世界と議会』第471号、2003年)  
政策研究大学院大学オーラル・政策研究プロジェクト Web Page  
<http://www.coe-oralhistory.grips.ac.jp/>  
オーラルヒストリー協会準備室(東京大学先端研・御厨研究室)

<sup>23</sup> 例えば NPO「昭和の記憶」の活動が挙げられる (<http://www.memory-of-showa.jp/>)

<sup>24</sup> 東京大学、京都大学、立命館大学、徳島文理科大学などにこうした取組が見られる。

<http://www.mikuriya.rcast.u-tokyo.ac.jp/oral.html>